

分析科学は社会の偏見に向き合えるのか



井原 敏博

テレビのワイドショーやネットのニュースサイトなど様々な情報に接するにつけ、この数年、急速に世の中が荒れてきたと感じるのは私だけだろうか。この状況を招いた大きな要因はウェブ、特に SNS である。同質の確証バイアスを共有する“友達”と「いいね」で繋がることで偏向したネットワークが形成される。ネットワークはエコーチェンバーとなり、そこは自らの承認欲求を満たすことができるのでとても居心地が良い。さらに出来過ぎたアルゴリズムによって形成されるフィルターバブルが耳障りな情報を排除するので人々はタコツボから抜け出すきっかけを失っている（コロナ禍による巣ごもりはこの傾向に拍車をかけている可能性がある）。この状況は、世の中のデリケートな 이슈 に対する人々の立場を二極化し、異なる陣営への執拗な攻撃（“正義を信じる”ものはしばしば苛烈である）は止むことがない。本原稿を書いている6月現在では、大規模 PCR の是非、東京オリパラ開催の是非、コロナワクチン接種の是非などといった話題の周辺が喧しい。少し時間を遡ると、米国大統領選挙、小児甲状腺癌^{がん}の継続的モニタリング、HPV ワクチンなどを対立軸としてタコツボ間の争いがあった。ちなみに、Twitter の使い手であった前大統領は、今でもある種の人々の間では救世主である。反ワクチン主義者によると mRNA ワクチンを接種した人は2年後に命を落とすことになっているらしい。

確証バイアス、すなわち偏見に基づく行動は、客観性を重んじる科学者のあるべき態度とは徹頭徹尾相容れない。しかし、例示したイシューはどれも複雑であり、実は正答を与えるのは非常に難しい。PCR に関して言えば、感染率の低い集団における偽陽性、偽陰性の数（割合）等の統計的理解が最も重要だが、現実世界では病床数や医療従事者等の医療資源が是非を判断するための境界条件を決める。あるいは、（誤解を恐れずに言えば）医師会の本気度や、その与党に与える政治的圧力も考慮すべき要素になるかもしれない。

偏見を最小にするために、科学者は最大の不確定性を残して観測結果を解釈・記述する。新たな事実が得られたら、必要ならそれ以前の主張を躊躇なく棄てる。科学者のこの“謙虚な説明”は、単純明快な陰謀論やフェイクニュースとは対照的に、社会にはインパクトのない冗長なものに映ることもあるかもしれない。しかし、それが科学者としての譲れない矜持^{きやうぢ}であり、科学の流儀である。特に分析科学に携わる者にとってはこの振る舞いこそがまさに生命線といえるだろう。私の担当する講義、「分析化学 I」の最初の1コマでは、誤差の伝達やデータの統計的処理を扱うなかで学生には結果（ファクト）と真摯に向き合うことを学んで欲しいと思っている。分析科学が世界を救うなどと大それたことを言うつもりはないが、私たちには科学的観点からの冷静で根気強い説明が求められるし、社会（タコツボの住人やマスメディア）には、わからないことはわからないものとして、また、複雑なことは複雑なまま受け入れる寛容さと包容力を期待したい。

〔Toshihiro IHARA, 熊本大学, 日本分析化学会九州支部長〕